日本哲学プラクティス学会第５回大会
シンポジウム「土壌としての哲学」報告

小川　泰治（第 3 期・第 4 期大会開催委員）



登壇者の方々（写真右から大室さん、楠本さん、八巻さん）およびコメンテーターのほんまさん（写真左）

2024 年 9 月 29 日(日)に長野県立大学三輪キャンパスにて日本哲学プラクティス学会第 5 回大会が開催された（前日には同会場で哲学プラクティス連絡会第 9 回大会が開催されており、2021 年 9 月以来の連日開催となった)。当日は大会テーマ「自生する哲学」のもと、21 件の研究発表(うち 3 件がオンライン)、4 件のワークショップが行われ、多くの研究者と実践者の集う場となった。

以下では第 3 期大会開催委員会（委員長：土屋陽介）が企画したシンポジウム「土壌としての哲学」の内容を報告する。大会予稿集にはシンポジウムの要旨が以下のように書かれている。

今回の大会では、テーマとして「自生する哲学」が掲げられました。この言葉からは、はじめは小さな種であった哲学の実践(プラクティス)が、さまざまな環境で芽吹き、根を張り、それぞれの色や形で花を咲かせている様子が思い浮かびます。

一方で、何かが芽吹き、根を張るということは、それらを受け止める「土壌」との関係抜きでは語ることはできません。「哲学」の種を受け止めた様々な現場では、どんなことが起きているのでしょうか。哲学は、外来種のように蔓延り、その土地の生態系のバランスを崩してしまうものなのでしょうか。あるいは、ミミズやダンゴムシのように、または肥料のように、その土地を耕し、環境を豊かにして、なにかよきものが芽吹いていくための新たな「土壌」にもなりうるのでしょうか。

そして、それぞれの現場には多くの場合、様々な働きかけや調整を行うことで哲学の種を受け入れるための土壌を耕し、その芽の生育を見守る方々が存在します。そのような視点からは、哲学が「自生」するという大会テーマもまた、一面的な見方にすぎないものとして問い直される必要があるのかもしれません。

今回のシンポジウムには、それぞれの現場に哲学プラクティスを誘致し、実践者と協働するコーディネーター的役割を務められてきた方々をお招きすることにいたしました。3 名の登壇者のそれぞれの取り組みをお伺いしながら、「土壌」というキーワードを通じて見えてくる哲学プラクティスの姿について、参加者の皆様と考えてみたいと思います。

このような趣旨のもと、当日は 3 名の登壇者の方々にご自身の哲学プラクティスにかかわる活動の紹介をしていただいたうえで、シンポジウムのテーマである「土壌」や「自生」とご自身の活動のかかわりをお話いただいた。登壇順に紹介していきたい。

「問い」の場としての展覧会

八巻香澄さん（東京都現代美術館 学芸員）

八巻香澄さんは現在、東京都現代美術館の学芸員として、展覧会を「問い」の場にすることを目指し、展覧会企画の仕事を行っている。これまでユニークな展覧会の関連プログラムを数多く行われてきたなかで、哲学対話を一つのキーとされてきた。「美術館のソーシャルワーカー」を目指し、展覧会中に展示室に長く滞在し観客の方と展覧会の感想や来館の理由などのおしゃべりをすることも大切にされている（その意味で「美術館のおばちゃん」とご自身のことを称されることもある）。

八巻さんは、美術館での哲学対話の取り組みが広がりつつある現状について、「対話による鑑賞」(対話型鑑賞)との比較をもとに考察された。「対話による鑑賞」は作品鑑賞のためのメソッドが確立されておりコミュニケーション力などを鍛える手法として美術館以外でも教育やビジネスの文脈でも注目されてきた。その一方で哲学対話は、作品の理解を必ずしも目的とはせず、より自由に各自が作品を通して自分がどう考えたかを話すことができるものである。いずれも良い対話ができれば最終的にたどり着くところに大きな違いはないものの、現在の八巻さんは、展覧会を「問い」の場にしたいという考えのもと、哲学対話のほうにより着目しているとのことであった。

では、展覧会を「問い」の場にするためにはどのような方法が考えられるのか。八巻さんは４つの考えを述べられた。最初の 3 点は展覧会の設計時の工夫である。第一に、テーマに問いが内包されていること、第二に、考えたり対話したりするスペースがあること（展示室内に休憩スペースを置くなど）、第三に、展覧会は考える場であることを伝えるために、他の人が思考している様子が見えること（観客のコメントや関連プログラムを公開するなど）である。これに加えて、第四に、八巻さんは「私はあなたに期待している」というメッセージ、それを通して「あなたの意見が重要なのだ」と伝えることの意義を強調された（大会当日の鈴木径一郎さんによる研究発表「「集う場」としての地域での哲学カフェと、「誰もに期待する」ときおこること」に触発されたとのこと）。八巻さんによれば、展覧会とはアーティストや美術館の考えや正解を受け取る場所とするのではなく、観客一人一人が考えていく場だからである。

具体的な事例としては、東京都庭園美術館での「こどもとファッション―小さい人たちへの眼差し」（2016 年）、「装飾は流転する―「今」と向きあう 7 つの方法」（2017 年）、そして東京都現代美術館での「あ、共感とかじゃなくて」（2023 年）、「翻訳できない 私の言葉」（2024 年）が紹介された。行われた哲学対話の試みは非常に多岐にわたり、子どもや大人を対象にした対話以外にも哲学ウォークの取組もある。また、ファシリテーターによるイベント以外にも、会期中に対話のための部屋を用意されたほか、テーマにかかわる問い（たとえば「共感とはなんでしょうか？」）について各自が考えを折り紙に書き壁に貼っていくような試み、さらに筆談による対話も行ってきた。

ファシリテーターを招いて行う哲学対話の際には、八巻さん自身は対話には加わらず見守っていることが多い。だが別途、展覧会の企画者としてグループでの対話をファシリテーションしたり、観客と一対一で対話をしたりという機会も設けている。一対一で話すときには、展覧会の内容に触発されてプライベートで切実な話題をあげる観客も多く、まるで哲学カウンセリングのようだという。

最後に、「一連の活動を土壌や自生というキーワードと関連付けて表現するなら」というシンポジウム企画者から登壇者への共通の問いに対しては以下のように回答された（ご自身の言葉をそのまま紹介する）。

> イメージしているのは野原とか河川敷とか土手のあたりのほとりの畑あとです。どんな種が埋まってるかわからないし、そこで単一栽培をするための畑でもない。植えたら生えてくるかもしれないし、植えてもいないものが生えてくるかもしれないし、もう生えているものを摘んでもいいし、寝っ転がるだけでもいい。そういう誰かが哲学するかもしれない場所を作るのが私の仕事かなというふうに思っています。

過去・現在・未来をつなぎ、土壌をケアする「キュレーター」

楠本亜紀さん（犬てつ 主宰／Landschaft 代表／インディペンデントキュレーター）

楠本亜紀さんは現在、愛知県犬山市を拠点としながら複数の活動に取り組まれている。川崎市岡本太郎美術館での学芸員からキャリアをスタートされたあと、フリーランスとして独立し写真を主とした企画のディレクションやリサーチを行うのと並行して、2009 年に犬山市に移住された。当初、犬山ではあくまで「娘のお母さん」として娘の苗字で呼ばれるような存在で、名前も縁も後ろ盾もなかった。しかし、そういったご自身のフィールドではないところだったからこそ、哲学プラクティスを導入してみたいと思われたという。

犬山に移住して、だいぶ知り合いも増えてきた 2017 年、名古屋や東京に出向くのではなく自分のいる場所に場をつくり人を招けばよいという発想の転換のもと「犬てつ（犬山×こども×大人×てつがく×対話）」の活動を開始された。進行役として安本志帆さんに並走してもらうなか、当初から、「この場は本当に「誰にでも」開かれている場なのか？」「みんなとはだれか？」という問いを抱えることになる。犬てつは場所柄もあってか、とにかく自由な環境で育ったこどもたちがベースにあり、会場を駆け回ったり、遊びをはじめたりといったカオスな状況がそこにはあった。結果、ある参加者がいるから行きづらいと言う参加者がいたり、場がうるさすぎて声が聞こえないという苦情を受けたりしながらも、参加者を変えるというよりは環境を整えることを通して試行錯誤し、参加者が安心感をもてる場づくりを目指されてきた。

こうして哲学プラクティスに取り組んだ結果、犬てつでは何が起きたのか。一連の活動の記録を日々ブログにアップし、それをもとに参加者の方たちとふりかえりを重ね考え続けていくことも含めて「探求の共同体」ができてきたのではないか、と楠本さんは述べられた。コンフリクトも日々生じながらも、哲学対話を通じて、何かあったときには話し合

いながら解決できるような他者とのかかわりや信頼感が生まれたという(一連の記録は『こどもと大人のてつがくじかん　てつがくするとはどういうことか？』(2020, Landschaft)にまとめられている)。

その後、楠本さんは犬てつ以外の場へと哲学対話を持ち出そうとし、犬山市とも協働しながら「男女共同参画事業」や「まちづくり自主学校」といった枠組みのなかでも対話の場を作る活動を展開されていく。そのなかでジェンダーやセクシャリティについて子どもと大人が一緒になって考える哲学対話を企画されたり、哲学対話の場で出てきた「どうして女の子は中学校の制服でズボンがはけないの？」という問いをきっかけに、その問いを出したこどもが実際の市議会でフリースピーチを行い、制度が変わったこともあったという。哲学対話が現在において対話をする営みであるとするならば、上記のようなアクティビティは未来をつくる実践という位置づけにあたるものである。

さらに、現在・未来だけでなく「過去との対話」として「みんなのアーカイブ」という市民団体を立ち上げられたり、犬てつの活動のなかでも過去・現在・未来をつなぐというコンセプトのもと「子ども風土記」や「未来会議」といった取り組みを行ったり、出版社とオルタナティブスペース「Landschaft」（風景・風土の意味）を立ち上げられるなど、狭い意味での哲学対話にとどまらない広範な活動を現在まで続けられている。

シンポジウムのテーマである「土壌」について、楠本さんはご自身の活動に紐づけながら、土壌を耕すことで深く掘るという縦軸とともに、フロンティアで開拓していくような横軸、この両面に言及された。多様な活動を展開する楠本さんはご自身の肩書を名乗る際にいつも逡巡されてきが、近年は「キュレーター」と称される。キュレーターのもともとの語源は「ケア」である。つまり、とりあえず何かが起こりうるような場を開いて、そこで何かが起こるように注意しケアしながらかかわっていく、ということをご自身の役割として位置づけられているとのことであった。

最後に、哲学は自生するかという問いについては次のように応答された。「人が生まれて、他者と出会うことによって必ず問いが生まれてきて、その問いが哲学だと思っている。だから哲学は自生する」。自生した哲学の種や芽が摘み取られず、それが雑草のように茂っていくためにはそのためのスペースが必要である。キュレーターとしての楠本さんの一連の多様な活動はそのような場を生み出すものなのではないだろうか。

なぜＭＢＡに思考系の科目の充実を図ったのか

大室悦賀さん（長野県立大学大学院ソーシャル・イノベーション研究科 研究科長）

大室悦賀さんはこれまでのキャリアを通してソーシャル・イノベーションなどを中心テーマとしながら経営系の研究に取り組まれてきた。哲学を専門とはしてこなかった大室さんが、長野県立大学に MBA（経営学修士）を取得できる専門職大学院が設置されるにあたって、なぜ哲学や対話の要素を中心に置くカリキュラムをつくろうと思い至ったのか。その背景には経営の研究を続けられるなかで大室さんのなかに生まれた違和感がある。すなわち、主観と客観を明確に切り分けたうえで、研究については客観的に行うものだと語ら

れる一方で、イノベーションという分野で新しい変化を起こそうとすれば主観的なものが不可欠となる。ここに矛盾があり、それを違和感として持ち続けられてきたという。

では、そもそもイノベーションという分野ではどのような議論が現在なされているのか。イノベーションをめぐる議論は企業の中で新しいものを生み出すことを目指すという「クローズド・イノベーション」という考え方から 2010 年代にかけて「オープン・イノベーション 1.0」「オープン・イノベーション 2.0」という考え方へと移り変わりを見せている。すなわち、企業同士、また企業だけでなく市民や行政、研究機関も含めて多様な相互作用を引き起こすことに力点が移ってきているのである。だが、とりわけ日本では、前述したような主観と客観を区別する二元論的な前提のせいで、そういったイノベーションが十分に生まれていないという課題があると大室さんは述べる。近年の研究でも、従来のイノベーションに関わる手法や研究では社会的課題の縮減はできても根本的な解決には至らないという指摘がなされているそうだ。

そこで、大室さんが二元論的な見方の克服のために注目したものが、量子力学、その背景にある仏教の「縁起」などの概念、そして、多くの経営者たちも学んでいる禅を始めとした東洋哲学である。これらをヒントに考えてみると、ビジネスにおいて個の自立と共創をどう捉えなおすのかという問題が明らかになってくる。企業人は実は問いが立てられないと大室さんは指摘する。課題が設定されればそれに向かって動くことができるが、自分自身で課題を立てることができず、また共創についても十分に他者との相互的なかかわりが十分にできていない。こういった課題にアプローチするために、東洋哲学や対話の必要性を大きく感じたという。

以上のような経緯から大室さんは長野県立大学に経営大学院が設置される際にも哲学や対話を中心に据えるカリキュラムを構想することとなった。その際にあらためて経営学の世界を見直してみると、企業の経営スタイルの違い、またその根底にある思想の違いに着目することが必要であることがわかってきた。そして「社会的物質性」という考え方に出会い、さらに new materialism の研究を進めたことで、二元論的に物事を分けて考えるのではなく、それらを関係的に捉えることで二元論を調停し克服することが日本の企業には不可欠の課題であるという認識に至ったという。

従来の否定的二元論に対置して肯定的二元論という概念を立てたうえで、大室さんが二元論の調停・克服プロセスとしてカリキュラムを構想されるうえで重視したのは次のような点である。すなわち、二元論的な思想や世界観は知らず知らずのうちに私たちのなかに入っていることを意識してもらうこと、また二元論的に物事を分けて考えることは便利であり重要でもあるがそれだけではイノベーションは生まれないということである。これらを実際に理解するために、考えること、そして問いを立てることの意義を強調して伝える必要がある。そこで本学会の大会開催委員でもある神戸和佳子さんを主担当とする哲学思考を中心に、アート思考、システム思考、身体性思考、セルフマネジメントといった領域も含む「思考科目」を多く含むカリキュラムを編成されたのである。

2022 年度に設立したソーシャル・イノベーション研究科は 2023 年度末にはじめての修了生を輩出されたばかりである。修了生を介して、また行政とも連動しながら新しい動きも見え始めているという。大室さんたちの対話と哲学を根底に置いた MBA プログラムの試みは、長野の地を起点に社会で哲学が自生するための土壌となり始めていることが大い

に伺い知れた。

コメンテーターによるコメント、質疑応答・ディスカッション

3 名の発表ののち、コメンテーターのほんまなほさんからいくつかの指摘がなされた。第一に、本シンポジウムの背景にある「種をまく」といった表現について、はたして私たちは何の種を、何のためにまいているといえるのだろうかということ。第二に、「哲学プラクティス」という言葉のそもそもの意味について。一つの起源はドイツでゲルト・アーヘンバッハによって 1983 年に開業された哲学相談所にある。アーヘンバッハは哲学者が対話を通して人の人生にかかわろうとしていたのであり、それは単なるワークショップの実践などではなく、哲学者が大学の外で仕事をする場所の意味であった。第三に、前述の意味でいえば、登壇者 3 名はそれぞれが（単なる「哲学実践者」と区別した意味で）哲学者あるいは哲学プラクティショナーであるということ。一般に哲学者という語は八巻さんや楠本さんがイベントの際に招くファシリテーターのことを指すものと考えられることが多い。だが、実はそこで哲学的な役割を担い、種をまいているのは実は八巻さんや楠本さんご自身であるのではないか。また、大室さんのケースでもカリキュラム設計の際に招聘した哲学（研究）者のみならず、大室さん自身も恐れずになんでもやってみる人という意味での哲学者であるといえる。だからこそ、登壇者 3 名の方たちが自身を哲学者ではないとみなすとしたら、そのときに思い浮かべられている哲学者とはいったいだれのことなのかという問いが重要になってくるのではないか。このようにほんまさんは指摘した。

そののちも登壇者間のディスカッションやフロアとの質疑応答が活発に行われた。「あらためて、みんなとはだれか？」「（八巻さんや楠本さんの活動を筆頭に街場や公的施設に哲学対話の場が増えつつある中で」あえて大学（院）に哲学のカリキュラムを置く意味はなんだろうか？」といった問いが登壇者ご自身のなかから出てきたほか、お三方それぞれの魅力的な活動への興味が伝わる質問も多く見受けられた。紙幅の都合上すべてを紹介することは叶わないが、本シンポジウムの趣旨からみたときに特に記録しておくべきだと思われるやりとりをいくつか紹介したい。

まず、「今いるコミュニティを離れたとしてそれぞれの場所で活動は継続する？」という質問に対する登壇者おふたりの回答は哲学対話の昨今の広がりを考えるうえで重要な視点を含むものであった。楠本さんは自身が犬てつを離れたら継続は難しいのではないか、そして、犬てつは唯一無二のものになっており（別の地域や場所、人とつくるような）「もう一つの犬てつ」はない、と応答された。八巻さんもまた美術館学芸員という仕事の属人性をふまえ自身がいなくなったあとに同様のことが続くとは思わないと述べられたうえで、自身が行っていたのは土壌づくりのようでいて「プランター」でしかなかったのかもしれないと（少々悲観的なニュアンスで）付け加えられた。お二人の語りから見えてくるのは、各地の土壌のもとで自生しつつある哲学の営みはそもそもが、容易に広がったり、引き継いだり、移し替えたりができないようなものであるということではないだろうか。言い換えるならば、お二人の実践は人とコミュニティが密接に結びつくことで生まれているということでもある。このことは八巻さんの悲観的な語り口には反して、むしろそれぞれの実践が独自の魅力をもつゆえんともいえるだろう。


フロアを交えたディスカッションの様子

全体ディスカッション後半では「哲学カフェや哲学対話の裾野がもっと広がるには？」という問いが参加者の方から提示された。確かに、本学会に集う私たちは哲学（プラクティス）をよいものだと考え、それを普及したいと思うことがある。だが、大室さんはこの問いに対してビジネスの文脈に引き付け次のように指摘された。すなわち､広げようとすると人は｢簡単化」しようとする、だが「簡単化」するとすぐに陳腐化する。だからこそ普及を第一に考えるのではなくて、哲学をまずはそれぞれが楽しむこと、そして楽しそうにしているところに人が集まってくるというあり方がよいのではないかということである。

関連するやりとりは「日本のすべての土壌にあう哲学はあるか？」というフロアからの質問に対するコメンテーターのほんまさんの応答にも現れていた。ほんまさんは、この問いに対し､「むしろ私たちが「すべて」「みんな」と思考を広げてしまうのはなぜか？」というさらなる問いで応答した。各々の活動を広げ展開したいという衝動のようなものが私たちにはしばしば生まれてしまうことがある。しかし、だからこそ、いまここにある土壌から考え続けることの意味を取り上げることのほうに本シンポジウムの意義があるとも言えるだろう。

哲学者にできることはまずはそれぞれの土地で丁寧に土壌を耕し、哲学することを楽しむことであり、それこそが種をまく行為なのかもしれない。そこに少しずつ人が集まり、場が続いていくことで、哲学（プラクティス）がそれぞれの地域に根付き、さまざまな形で花を咲かせることにつながっていく。そして、そのためには個々の環境の状況や求めに応じて種が芽吹くための「土壌」を耕す存在抜きには語れない。要旨では各地ではじめの一歩を踏み出し、そこで土壌を育んできた登壇者の方々を、哲学者と暗黙のうちに区別するかのように「コーディネーター的役割」と書いている。だが、当日司会を務めた山本和則さんが指摘したように、実はそこにいたのは哲学することを楽しもうとする哲学者その人だったのではないだろうか。

シンポジウムを終えて

本シンポジウムが開催された大会は日本哲学プラクティス学会としても初めての地方開催であり、なおかつコロナ禍を経て 2018 年以来の対面開催となった。前日の哲学プラクティス連絡会と合わせて多くのワークショップが開催され、哲学プラクティスの研究や実践にかかわる方々どうしの交流の機会も多く生まれ、対面で人々が集い、具体的な実践やその報告をもとに共に考えることの意義を再確認することができた。

すでに知られているように「哲学対話」という一つの呼称をとってもその実践内容は実に多様な広がりを見せている。このような実践の多様さに対して、哲学プラクティスの学術研究を謳う本学会や個々の研究者はどのような態度で臨む必要があるだろうか。多様な実践を哲学対話や哲学プラクティスと一括りにし、学術的な検討対象とすることはときに非常に粗い考察を生み出すことになりかねない。他方で多様なものをただ多様なままにして関係づけることを試みなければそれは個々の実践報告以上のものにはなりがたいだろう。

シンポジウムを終えて報告者が感じたことは、個々の実践を学術研究の議論の俎上に置くために、まず私たちはそれぞれの実践の土壌になにがあるのか、そしてそこにいるコーディネーターや哲学者はなにを課題だと考え、どのような実践を試みているのか、このことを真摯に知る必要がある、ということにほかならない。だからこそ本シンポジウムのように、一つの共通する切り口やテーマのもとで複数の実践や取組を通覧し、研究者と実践者がともにその意味を議論する機会がこれからも定期的にもたれることを強く望みたい。